

58

## 大久保忠寛の「病幼院創立意見」(安政4年)と 東京府病院(明治6~14年)について

稲松 孝思, 松下 正明

東京都健康長寿医療センター

江戸幕府は、黒船来航時に海防掛を中心に西欧文明に対する開明的施策を進めたが、安政の改革とも言われる。その一つとして安政4年(1857)に、目付・海防掛・蛮書調所総裁である大久保忠寛(1818~1888)が提出した「病幼院創立意見」は、七分積金のような財政基盤による大規模な西洋式病院・救貧施設を構想したものであった。4年後の文久元年に出来た長崎養生所は、日本における近代西洋式病院の魁をなし、幕府の海軍伝習所の一部として、ポンペ・松本良順の活動により建設・運営されたが、永井尚志、岡部長常、木村喜毅らの長崎奉行・海軍伝習所関係者が支援した幕府営の病院であり、大久保の病院構想の長崎における実現ともいえる。その後の江戸開城時、七分積金は、大総督府に引き継がれたが、このときの幕府会計総裁・若年寄が大久保一翁(忠寛)、勘定奉行が木村喜毅であった。さらに、明治以降の救貧施設である「養育院」は、大久保一翁が府知事の時に、七分積金を原資に創設され、その運営が渋沢栄一に引き継がれたことなどを報告してきた。養育院創設直後の明治6年に、東京府病院の建設計画が公布されたが、この病院の経緯についてあまり述べられておらず、誤解も多いので、東京市史稿などに基づいて、その跡を辿り、大久保一翁との関係について考察した。

大久保府知事が上野に養育院の恒久施設建設中の明治6年(1873)1月17日、皇室からの下賜金一万円を原資とする東京府病院建設計画が公布されたが、七分積金は使用されていない。当初建設予定地は八丁堀であったが、9月3日に芝区愛宕下の本田邸跡に変更された。この地は大久保一翁邸があり、隣接地に静寛院宮(和宮)邸を府が用意したすぐ近くで、福沢諭吉が関係する慶應医学所(明治6~13年)とも近かった。府下病院(東京府病院)は明治7年(1874)5月2日に開院したが、建坪862.5坪の大規模なもので、ポンペに学んだ岩佐純院長(明治7年5~11月)、佐々木東洋(明治7年2~9月)副院長、皇室侍医の派遣を得、米内科医アシミート(Albert Sydney Ashmead: M7.4-M8.10.)、英外科医のマンニク(Charles Manning: M8.6.-M10)を雇い、西洋式病院を目指し、個室~雑居部屋(入院料は1円~25銭/日)に4等に分かれていた。その後、岩佐、佐々木が東京医学校に転じ、蘭医のブークマ(Sharko Weebenga Beukema: M9-12)が雇われた。また、長谷川泰(佐藤尚中、松本良順、福沢諭吉、松山棟庵らに学ぶ)が後任院長となり、この時産婆養成所が併設された。また、長谷川は明治9年4月に平行して済生学舎を立ち上げている。

明治5年、養育院発足時、収容者の医療は町医師・村上正名が担当し、その後、佐々木東洋門下が加わり、明治8年に東京府病院に籍を移し、養育院派遣となった。明治13年、民業を圧迫するので、窮民のみを対象とするよう病院運営が変更された。その一方、窮民を税金で養うことは、怠惰な貧民を増やすのみという田口卯吉らの論があり、明治14年7月、東京府病院は廃院となり、医療機器や薬品は、癲狂院に転用された。明治14年5月1日、英国留学から帰った高木兼寛は、銀座に成医会講習所を設立し、翌15年8月、旧東京府病院建物を月額50円20銭余で借り、松山棟庵ら慶應医学所や海軍軍医学校の医師達と有志共立東京病院を立ち上げた。明治20年に皇后を総裁にいただき、下賜金を運営の助けとし、東京慈恵医院と改称した。明治24年成医会講習所は慈恵医院に引っ越して東京慈恵医院医学校となった。その財政基盤の整備に、渋沢栄一が大きく貢献している。一方、養育院は大久保一翁更迭後、税支出の停止、上野からの移転を迫られて神田、本所へ縮小移転したが、渋沢らによる財政支援で維持された。福沢諭吉は木村喜毅と終生親しく、大久保一翁は木村の尊敬する先輩であり、この三人は昵懇の仲で、英国系病院・医学校を目指したが、大久保の府知事更迭(明治8年末)後破綻したと言える。安政四年の大久保忠寛の病幼院立意見が、長崎養生所、養育院、東京府病院の創設に強い影響を与え、明治7年の東京府病院設創立は、安政の改革の残照と言える。